令和２年度第１回総合教育会議議事録			
日時	令和３年１月 28 日 13:30～16:00	場所	真庭市役所　３階　応接室
出席者	市　長　　：太田　昇 教育長　　：三ツ宗宏 教育委員　　：井口利美、常本直史、徳山周一、髙谷絵里香 政策アドバイザー：荒瀬克己、山下陽子、山本健慈		
協議事項	・多様な自己実現が選択できる教育環境について ・高校との連携について		
経過及び結果	○開会 ○市長挨拶 市長：本日はこういう時期にお越しいただき、ありがとうございます。ウェブでの開催も必要ですが、可能ならば顔を合わせて議論するのは大切だと思っています。真庭市総合計画は第二次の改訂を取り組んでいました。次の時代を生きる高校生も一緒になって取り組んでいきたいと思っています。総合計画の中には、教育大綱の理念である「共育の力により、一人ひとりの自ら幸せになる能力を最大限に引き伸ばす」、また、「誰一人取り残さない、持続可能な共生社会を実現する」といった観点を新たに加えました。本計画により、真庭市の地域価値の向上を目指して取り組んでいきます。 今回は、１つ目のテーマとして、「多様な自己実現が選択できる教育環境について」ということで、自己肯定感とは何か、どうすれば子供に自己肯定感を高めて、自己実現を選択できるような環境を整えていくことができるか、そもそもの公教育の意味や価値について、共有していきたいと思います。 ご存知のとおり、日本の子供たちは国際調査の中では、自己肯定感が弱い。それを踏まえて、どのような環境を整えていけばいいのか、その中での公教育としての役割を考えたい。決して今回だけで結論がでる性格のものではないので、何回も議論し教育委員会で実行していただきたい。 ２つ目として、「高校との連携推進について」であるが、真庭市の校地統合の課題がある。県立高校であるため、県の教育委員会が中心であるが、真庭市にある高校ということで次の真庭を担う高校生を育てる教育機関であるという観点から、実のある高校教育をしていただくために、真庭市として応援していきたい。 文科省からも高校教育においても基礎的自治体が入ってやっていくという仕組みを作っているという。過疎問題懇談会でもそのような発言をしてきたが、実現されつつある。 今日はよろしくお願いします。		

○自己紹介
総合政策課：本日の出席者名簿は別紙のとおりです。市長、教育委員 5 名、政策アドバイザー3 名です。荒瀬先生と山本先生は、本会議発足時より教育大綱の策定などにもご指導いただいています。今回より、新たに山下陽子先生にも参加いただけることとなりました。

教育長：コロナ禍の中で既存の価値観が大きく揺らいでいる。その中で新しい価値観や生き方を育むことが教育文化の一番中核を担っている。それを描く中で、このような議論ができることはうれしい。

井口委員：主婦という立場、思春期の子供を持つ立場として、参加していきたい。

徳山委員：校長を退任して 5 年が経過した。山下先生には落合小学校在任時にお世話になった。

常本委員：真庭高校の校長で退職し、教育委員 4 年目である。教育について再度学ぶ気持ちで参加したい。

髙谷委員：今年度から教育委員に就任した。2011 年 8 月末に移住し、蒜山にて農業をしている。教育の現場は初心者ではあるが、大きな学びのテーマをいただいてありがたいと思っている。

荒瀬先生：一昨日文部科学大臣に答申した「令和の日本型学校教育の構築をめざして」という内容の一部を紹介したい。

山下先生：お世話になった人に囲まれて、緊張している。教師生活を勝山で始め、最後は真庭高校の立ち上げに関わったものとして何か協力できればと思っている。

山本先生：社会教育の専門家としてやってきた。今は大学の再建に尽力している。

○協議
市長：まずは、アドバイザー3 名からお話しいただきたい。荒瀬先生からよろしくお願いします。

荒瀬先生：おととい文科省に提出した中央教育審議会の中から、「自己肯定感」の部分について抜粋している。自己肯定感についてはさまざまな議論がされている。答申の中で、自己肯定感という言葉は 5 か所で使われている。答申自体は自己肯定感を前提としており、そこで初めて主体的な学習者になれるという内容である。

（資料 1-1 ページ下部）答申の副題が「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」であり、「学び」という表現されている。「学び」は、「指導（教える）」という言葉と対である。「学び」という言葉は、子どもたちの視点に立ったものということである。新型コロナ感染症の状況を踏まえて、これからの学校教育はどうしたらいいのかということを議論した。
2 ページ目の赤字部分に、学ぶということを整理している。「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実することを目指している。新学習指導要領に基づいて、一人一人の子供を主語にする学校教育の目指すべき姿を具体的に描いている。学習指導要領とは、このように指導していこうということが記載されている。これを円滑に進めるためには、どのようなことが必要でどのような考え方に立つべきかということを具体に述べたのが今回の答申の位置づけだ。
この答申は 2 部立てとなっており、第 1 部は総論、第 2 部は各論として具体の内容を述べている。
3 ページ上部にある総論にて、「次代を切り拓く子供たちに求められる資質・能力としては、文章の意味を正確に理解する読解力、教科等固有の見方・考え方を働かせて自分の頭で考えて表現する力、対話や協働を通じて知識やアイディアを共有し新しい解や納得解を生み出す力などが挙げられた」とある。非常に重要な点であり、これまでは決まった答えをいかに早く正確に見つけるか、あるいはそれを再現するかということが重視されてきた面がある。これからの社会は答えが定まってないものを皆が納得できる答えに仕立てあげていくという、創造性が必要となる発想である。それをするためには自分自身が考えたことが周りの人に受け入れられる、自分がこの場で言っていいんだという思いがなければ、発信していけない。そのためには、自己肯定感や自己有用感が必要となる。
4 ページの上部には、具体的にこどもの学びや教員の指導、環境などが書かれている。やはり、子供の学びには「自己肯定感」が必要なのだと記載されている。
4 ページ下部の各論にも、自己肯定感について記載されている。ここでは特別支援教育の在り方について、5 ページ上部では外国人児童生徒等への教育の在り方についてでも記載されている。
ちなみに、外国人児童生徒等の「等」とは、必ずしもルーツが外国である生徒だけではなく、外国で生まれたり長年育ったりする日本人生徒も含めているためである。
4 ページ下部に「高等学校学習指導要領前文」を載せた。初等中等教育 12 年間（幼稚園を含まず）の最後の 3 年（もしくは 4 年）を担うのが高等学校教育であるが、前文については中学校教育や小学校教育、幼稚園教育も同じ趣旨である。
5 ページには学校教育において、教育課程とは何かということが示されている。一般に、とりわけ高等学校教員の感覚としては、教育課程（カ

リキュラム）とはどの科目をどの学年に何時間配分するかという意味合いをイメージしてしまう。だが、それとは異なり、教育課程（カリキュラム）とは、6ページ上部の記載内容「一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識する…」ということができるようにするために各学校が組織的・計画的に作るものだということである。次に、あらゆる他者を価値のある存在として尊重できるようにするため、という内容が続く。自分のよさや可能性を認識することができる、すなわち、自ら具体的に学ぶことにより自らが成長できると認識できることが大切である。自己肯定感とは、学ぶことにより自分が成長できると子供たちが実感できるようにすることが、周りの大人の責任である。
（6ページ）学校教育法に示された学力の3要素を示している。このうち、主体的に学習に取り組む態度（学習意欲）は、自己肯定感があって初めて可能になる。
（7ページ）今回の学習指導要領は「探究」がキーワードである。探究とは、生徒自らが自分で課題を発見して取り組み、それを振り返って、さらに学びを深めていくことだ。教科書に書いてあるものを学んで覚えるという内容ではなく、自分で取り組んでいくということである。これこそ子供が主語となる。気づいたことに基づいて問いを立て、答えを出していく。そして、それを常に振り返る。自分一人でできない場合には、周りの人と行う。このような取組みを行う際の評価はどうするか考えるときに、子どもを応援する評価ができるようにすることが大切である。
最後に、中央教育審議会答申の検討事項として、教職員の養成・採用・研修等の在り方や、それを支える教育委員会としての体制をどのようにするのかが記載されている。

山下先生：文化芸術の視点より「自己肯定感」を考えるとあるが、私は文化芸術の専門家ではないし、私自身も自己肯定感も低いほうなので、四苦八苦しながら本日の資料を作成した。高校教員30数年の中で、キャリア教育を通じて子供たちが成長していく姿を見ることが、教師としての糧となった。その点について、本日はお話したい。
資料にある丸窓であるが、この見えている屋根がある大原本邸というところで仕事をしている。文化はさまざまなものを含んでいるため、芸術と一緒に論じるのは難しい。なので、地域文化と芸術・アートを分けて考えることにした。
自己有用感は自己肯定感とここでは考えることにする。裾野の広い地域文化は自己有用感や地域に対する誇りを与えるもの、芸術・アートは洗練、優れた人のアンテナに引っかかったものの前に立つことで、地域文化や人に「風通し（揺さぶり）」を与えるものだと考えた。
地域文化力とは、結論としては「なまはげ力」ということである。文化や教育とは、ある意味押しつけでなければならないと考える。できれば家庭と学校と地域が価値観の共有化を行ったうえでの、押しつけが望ま

しい。3 者がタッグを組んで、子供たちにこれがいいんだ、これが地域として価値があるんだと、文化を押しつけることが、「地域まるごと学校」だと考える。
教師として大事なことは、ほとんどは真庭で学んだ。真庭はそれぐらい豊かな土地柄である。自然だけではなく、歴史や人の思いなどいろいろなことを教えられた。のれんや遷喬小学校を挙げたが、形のあるものから形のないものまで人の歴史やその思いに触れることは大事である。加納さんの四季のれんを作成する際に、勝山高校美術部が「加納さんはすごくこだわりを持って仕事をしている」と話していた。地元の人たちの思いを感じるということが、ある意味自分も何かいいところがあるかもしれないとか、その方たちに褒められることで自分も役に立つとか、感じることができるのではないか。旧遷喬小学校を設計した江川三郎八は元々福島の宮大工である。技師として岡山に赴任したが、岡山県にさまざまな設計を残している。ものにはそれぞれ歴史や込められた思いがある。真庭では、地元企業であるランデスさんや銘建工業さんなどの先進的な中小企業があり、杜のまち「真庭」を支えている。地元企業の貢献や人の思いを知ることが地域への思いに繋がる。
真庭高校の立ち上げに関わったが、その際に生まれて初めて農業科と関わった。それまではデータ中心の進学校しか知らなかった。真庭には農業や看護、家政科などのある高校や商業科のある高校がある。専門学科で地域密着の教育を行うことが、人材育成に繋がっており、これが地域と学校を結ぶ結節点になっていると感じた。大事にしてほしい。
それぞれの役割の中で、普通科高校の子供たちは、知識はあっても、頭でっかちになりがちである。知識による観念的な理解と現実は違うものだと、地域に出て体験することで知る。地域課題に取り組んだ子は必ず、「知れば知るほどわからなくなった」という。初めて社会を知る戸口に立ったのだと思う。知識は大切だが、その頭でっかちな概念を一回シャッフルされて混沌を持つことが大事である。それを作り出すのは、学校ではなく、家庭や地域の力である。そしてこの混沌を言語化し、整理するのが教師であり、そのための教師向けセミナーも大原本邸では開催している。生徒の混沌とした状況をそのままにすると「楽しかった」で終わってしまう。これを言語化して学びに紐づけることが教師の力である。それぞれが住み分けをし、分担をし、子供たちの教育に当たっていく必要がある。実は、混沌は言語化しないと、子供たち本人にも意識化されない。つまり、言語化されたものだけが子供たちの中に残っていくということである。実はその過程で自分にはいいところがあるとか、自分はこれでいいんだという自己肯定感が少しずつ芽生えてくるのではないかと思う。
倉敷に着任したのが 9 年前である。倉敷には天領夏祭りがあり、勝山では喧嘩だんじりがある。勝山では学校を休んででもだんじりに行くぐらい、ほぼ 100%の子が祭りを楽しみにしている。ところが、倉敷では祭りがあっても、ほとんどの生徒が普通通り部活を行い、祭りを避けて遠

回りして帰宅する。その当時のアンケートでは、勝山では「地元が好き」の回答が8割であった。対して、倉敷では2割弱となった。高校時代までに地元企業を知っている子は、地元への愛着が強いという結果もでている。そして、愛着を持っていると、Uターン希望者が多いという結果である。要するに、地元の愛着度とUターン率が大きく関わっているということである。地元に帰ってくることが大切というだけではなく、自己肯定感の醸成と自分の住んでいる街に対する誇りが関わっているということである。
地方の問題として、価値観の同質化、関係性の固定化がある。そこから来る思考停止は地方にとって大きな問題。アートはそのような思考停止をシャッフルする役割を持っていると思う。
ある時、大原美術館で倉敷南高校の生徒がワークショップをした。テント地を上げ下げして山をつくるというものである。生徒が四隅を持ち上げ形を作った後、学芸員から「この作者はだれか」という問いに生徒は、プレートに記載されている作者を答える。しかし「この山を作成したのはあなたではないか」と問われると、生徒は答えられなくなる。さらに、このテント地を児島で作った職人は作者ではないのかと言われると、誰にも答えられなかった。「作者」というわかりきったものからでも、それは何かを考えさせる力が芸術にはある。
時間・空間を超えてきたアートの作品は、見る者が自らの価値観を安心してシャッフルできる場を作る。美しいモノ優れたモノの前では、自分の価値観を裸にして、シャッフルすることができる。新しい価値観を産み出す力、それがアートの力だと思っている。

山本先生：朝早く目が覚めてNHKのラジオ深夜便で、漫画家のヤマザキマリ7さんの話を聞いた。彼女が14歳の時に、突然お母さんに「あなた、外国へ行ってらっしゃい」と言われ、イタリアへ行き、17歳の時には「フランスへ行ってらっしゃい」と言われ、フランスへ行った。
「最後にルーブル博物館へ行き、本物のモナリザを見てきなさい」と言われたが、それに興味はなく、たまたま自分が立ち止まって衝撃を受けたのが、紀元前の彫刻作品だった。芸術はなんでもありなんだ、何千年考えても皆同じことをやっているんだと思い、そこから自分の既成の概念をぶち壊した。そういうことが価値観をシャッフルするということだと思う。歴史的な価値があるから引き付けられるのではなくて、自分の感性と合っているから引き付けられる。
最初に、子育てや教育の中で「ほめて育てよ」というが、嘘ではないが、一面の真実にすぎない。物事を成した人は、親や先生が褒めてくれたから自信が持てたと言うが、それは生き残った人が言う言葉であり、褒められるのが苦痛で辞めた人もたくさんいる。それは表面化していないだけである。何が自己肯定になるかというと、持って生まれたものはみんな違い、それが自分自身とフィットしたものを褒められると、自己肯定感になる。しかし、親や教師に評価されたくて、嫌なことを頑張る

と「よく頑張った」と褒められるが、褒められるほど苦痛が重なり、完全に嫌いになるという人もたくさんいる。その人間の個性は何であるかを見抜く、本人自身が自己の個性を掴めるようなプロセスが教育や育てるということで必要である。
中央教育審議会生涯学習分科会には10年間参加した。荒瀬先生が紹介されたレポートでも、子供の発言はみえない。そして、この会議なども大学生の参加があってもいいと思うが、実現していない。大学においても日本では学生の参加を嫌がる。大人たちの、あれこれの議論が、当事者である子どもや青年にどのように捉えられているのかがわからない。当事者が参加することを大切にしなければならない。数年前に山下先生とともに、高校生のワークショップを行った。自己肯定感を議論するならば、ぜひ高校生にも入ってもらって議論するというのが重要だと思う。中教審は、最近30代の若手も入って、ようやく若い世代が入ったという感がある。そうではなく、次世代の担う人が参加することが大切である。
新型コロナ感染症に関して、研究がされている。そして、いろんな施策が先行しており、ITを使って教育するとあるが、それが何をもたらすかということについて検討がなされていない。その中で面白かったのが、山極寿一さん書かれている「スマホを捨てたい子どもたち」という本。人間の生物的な部分を失う枠組みは作っていけない。それを失って枠組みにはめると、とんでもないことになる。長年の人間となるプロセスは動物として発展されてきた。それを見失ってはいけないというようなことを言っている。
いろいろなニューノーマルがあり、デジタル支配が進みつつある。その仕組みを作るうえで、学校教育にもいろいろ入ってくる。その際に、人間の生物的な部分がどれだけ抑えられているか、注意を払いながら、進めなければならない。
和歌山には、継ぎ目のない織機を発明した島精機の島正博さんや、無洗米や金芽米を開発した雑賀慶二さんがいる。80歳を過ぎても少年のようである。彼らは、子どものころから、トラブルが楽しい。機械が壊れるのや故障するのが楽しかったという。小さいころからそういうことをずっとやっている。学歴を重ねていない分、余分な評価を受けていない。自分が熱中できることをずっと行っている。
東京大学が面白いプロジェクトを行っている。学校になじめない子や発達障害の子などたくさんが参加している。好きなことを好きなようにし、それを専門家がフォローし、ますます好きになる。
芸術の話があったが、学校が楽しくない、機械的な学びとなる時に、学校という枠組みはすごく狭く、やむ得なく評価が必要となる。評価から外れた、あるいは自由な空間・時間が、地域社会教育という場に設定されるべきである。その際に、山があり、谷があり、川あり、虫がいて、星が見えるという、そこのどこかに、ここにいる子供たちが興味・関心を持つということがあるので、その抽象的な表現ではなく、まさにドキ

ュメント、楽しそうにやっていることを見つけられる大人や地域社会である必要がある。そのために、一番心配するのが、学校教育のなかで芸術文化の部分がどんどん学校からそぎ落とされていき、多様な文化の幅の内容がどんどん縮小されていく。もし行政的に手当を考えるのであれば、そのようなことも考えていただきたい。
最後に、私には1歳の孫がいる。彼が私と同じ歳（72歳）になる頃には、22世紀直前、日本人口6000万人台になる。その時代に向けて日本が進む中に生きていくにあたり、真庭市がどのようになっていきたい、どうしたいのか考えていただきたい。先ほどの地域の愛着の話があったが、むしろ彼らが参加して考えて、一緒に作り出すことが自分の人生となる人もいるし、地域の定着になるのではないか。

市長：さまざまな視点から紹介していただきました。続いて、教育長から市内の子供の現状について、お願いします。

教育長：資料4をご参照ください。
自己肯定感はなんなのか、あるいは数字が一人ひとりを反映しているかということもあるが、現状としてご覧ください。現状としてよく用いられている指標を紹介する「自分にはよいところがあると思う」の問いへの肯定的な回答についての表である。真庭市も全国調査と似た結果であるが、真庭市の方が若干全国平均を下回っている。ただ、全体としては増えている。
荒瀬先生の話にもあったが、自分を肯定する気持ち、それが主体的な学びの土台であるという観点から、これは課題であるとして取り組みを行った。統一調査ではないが、今年度の岡山県調査結果は（2）の図表の通りである。
山下先生がお話された「地域が好きである」の肯定的な回答は、小5が95%、中1が92%、中2が90%であり、肯定的な状況である。
以上が子供の状況である。
真庭ではどう考えて何をしているのかを2ページに記載している。
真庭市で考える自己肯定感について、土台は令和元年の総合教育会議でも議論したとおりである。
基本的には憲法・教育基本法の理念を真庭の教育に活かす、真庭の良さを活かして幸せづくりの教育を進めることが基本理念である。自己肯定感を考える際に大切にしたい点は、まず1番目が「自分が自分であって大丈夫」「ありのままの自分を受け入れ、尊重する」という自己受容が大事である。
それと同時に、2番目として「安心して自分を輝かすことができる」「自分を承認する」「他者の承認を得る」「成功体験を積み重ねる」という観点で取り組みを行っている。
目的としては、多様性の中でどんな生き方・働き方をするのが幸せかを考えて選んで創り出す人を支えていきたいという思いで取り組んでい

る。
取組の方向は、自己有用感や自己肯定感に限らないが、基本的に軸は2つである。1つは、インクルーシブ教育という考え方である。大きな柱は、ユニバーサルデザインと合理的、そして適切な配慮をする、集団支持的風土を作っていくということである。ともに学ぶということを基準としながら、これを行っていく。
もう1つは、地域学習を核にして、キャリア教育を進めていく。体験を通じて、答えはないかもしれないが、問いを発する。対話して、納得する解を得る。それに基づいて、連携や共存（生徒同士・子供同士に限らず、地域も含めてである）の学びを大事にしていきたい。この学びのフィールドとして、地域を位置付けています。
自己肯定の反対語が自己否定であるのならば、自己を受容するということが1つ大事である。それと同時に、自己承認、まんざらではない自分に気づく、他者の承認を得る、役立つ自分に気が付く、やればできる自分、成功体験を積み重ねるといったことを、2つの軸を大切にしながら取り組んでいる。
多様性の中でどんな生き方・働き方をするのが幸せかを考えて選び創り出す人の育成に努めていきたいというのが概略である。
参考資料として、3ページ下部をご参照ください。教育委員会としてではない。自己肯定感の相対的にあるのは自己否定ではないかと思う。その一番顕著なものが自殺や不登校ではないか。特に、このコロナ禍を経て、学生の自殺が激増している。学校での繋がりが絶たれるというのは、一元的かもしれないが、1つの原因ではないか。その意味では教育や学校の現場はセーフティーネットとしての役割が大きいのではないか。むしろここをしっかり考えなければならないと改めて感じている。
4ページにはさらに詳細の図表を提示している。児童生徒の自殺者数であるが、率で見ても多いが、数としても大きい。不登校についても、平成25年を機に、激増している。この居づらさ・居場所として認知できない点については、解決方法があるわけではないが、我々が心して、大きな視点として物事を考えなければならないと感じている。

市長：現状を話していただいた。質問や意見を出して、議論を深めていきたい。まずは4人の教育委員より話していただきたい。

徳山委員：山下先生がおっしゃった「地域の文化力はなまはげ力」
にて「価値観を押し付ける」とあった。私も郷土愛は刷り込みではないかと思う。刷り込みをしていくことで地域の価値を見つけたり、地域の中で風土に触れ合う中で自己肯定感を見つけたりするのではないかと思った。
自己肯定感の捉え方が、日本的に捉えた時に自己肯定感がいいものでもあるが、外国の捉え方と異なっている気がしている。
日本だと自分はまだまだ頑張らないといけないと思える、それは自己肯

定感が低いから、そう思えるだろうと思う。それが日本人の良さでもあるのではないか。しかし、教育長の資料を見た際に、現状の自殺者数の増加を見ると、自己肯定感や自己有用感を子供のうちから付けていかなければならないのかなと思う。

市長：自己肯定感の定義の問題もある。若者の自殺率は低いが、日本の場合バブル崩壊後から 3 万人に上がっている中で、自殺対策を行い、自殺率は下がってきていた。今はコロナ禍で特に女性の自殺者が増えているが、それらの傾向を踏まえると、児童生徒の自殺者数が増加していることは大きな問題である。

常本委員：いつまで経っても、自分に自信がない自分がいる。その中で、子供の自己肯定感を高めることは難しいと感じる。みんなで日本の歴史や教育などをもっと探る必要があるのではないか。世界に合わせる必要があるのか。日本が世界をリードする存在になれないのか。土をいじって、野菜ができた時に感動する。そこで山本先生がおっしゃったように、われわれは地球上の生き物の一人なのだと実感を持った時に、初めて「できた」「できるんだ」というような経験をもっと子供たちがする必要があるのではないか。私たちが子供の頃はそんな経験をしていた。その時代に戻る必要はない。便利なデジタルなどはどんどん進めるべきだ。体育の授業では体育館のスクリーンにインターネットで倒立を見せた方が実際に見せるより勉強になる。これからは、デジタルと生き物としての我々が融合していくのに、農業はとても合うのではないか。農業科がある学校に勤務したが、自分で実際に行い、それを痛感した。今書道を行っているが、モノマネしても、うまく書くことができない。コロナ禍で旅行ができないが、絵が好きだから美術館に行く。モネの最晩年の絵に感銘を受ける。そのような感動やエネルギーを感じる体験を子どもの頃からどんどん行わせるということが、必要だと思う。真庭にはそのような題材がたくさんあるので、それを活用する必要がある。
義務教育に課されるものが重たい印象がある。特に幼小中高に繋がることが書いてある印象である。本当にみんなで行わなければならない。真庭ではそれができる状況だと思う。今後再編等はあるが、地域の方の理解や協力を得ながら、市と協力し、次の未来を担う子供を育てなければならない。我々の後に、自分の個の生だけではなく、何を残していくのかを考える必要がある。建物を残すことや教育することも大切である。9 月入学という話もある。次の世代に残せるものを考える。そのためには自分事として考える必要があるのではないか。

髙谷委員：今わたしたちは子どもの自己肯定感という話題を話しているが、その前に大人の自己肯定感が大切ではないか。いかに幸せな大人がそばにいるのか。そもそも大人が幸せそうでなければ、子供の自己肯定感は低くなるのではないかと感じている。荒瀬先生の話にもあったが、

子供は教わるではなく、子どもが主語で学ぶという視点や「なまはげ力」のように地域の大人が地域を好きだと感じることが大切なのではないか。まずは大人自身がどうなのかを考えなければならない。今までの教育は大人から子どもへ、上から下へではなく、これからは並んで学んでいくように変わっている印象を受けた。
私自身も農業と関係なく育ったが、今は農家を行っている。その中で自分は農業を通して日々幸せを感じているが、日々の中で幸せを感じられる大人や子どもが大切と感じた。

井口委員：荒瀬先生の話を受けて、全員とは言わないが、大学入試を最大の目標にしていたかたちがスタンダードだった。これを逆の流れに変わるのではないかと考えている。不登校の問題は学業だと思っているので重要なことである。
文化芸術の面においては、自分の気分を盛り上げる方法をいくつ持っているかが今後生き延びる力になるのではないかと思う。文化や芸術、スポーツなど多種多様の趣味を若いうちに経験することが大切ではないか。
褒めることやおだてることよりもその子の行いを認めることが大切ではないか。子供の価値観は親の価値観に似てくる。子供のやりたいことを間違っていても認めてあげるというのが親の器量であり、そうすることで子どもが安心感を得て、自己肯定感につながっていくと思う。
コロナ禍にあり、いろんなものの考え方が変わってきている。みな、この先どうなるのかと考えながら生きているが、柔軟に受け止め、視野を広げていくことが一番いいのではないのか。
どうやって視野を広げていくのか、まずは大人が視野を広げていくというのが大事ではないかと思う。

市長：有識者から意見をいただきたい。感想をお願いしたい。

山本先生：学校がロックダウンしたときに、3 か月ほど孫の勉強の面倒を見た。長男は、数字には興味がなく、取り組むことが苦痛を感じている。しかし、レゴに興味があり、立体的な創造性は発揮して、次々と組み立てている。幾何学的に興味はあるが、代数的には興味がないということである。これほどに興味の持ち方が違うのかと驚いた。
また、次男は、与えられたものを辛くても達成することにエネルギーを費やす。一心不乱に行い、達成することに精神集中する。独自のストレスを自らに課してしまう。個々の子どももちゃんと見える多様な視点を持った大人、包容力がある大人が必要ではないか。個性にバラエティが富んでいることを大人が理解することも重要である。数値化された子どもではなく、具体的な子どもを把握するという見方が必要だ。

山下先生：芸術文化について考えた。資料に閑谷学校の写真がある。先

日修学旅行として高校生とともに、閑谷学校へ訪れた。その際に、昔の中学生の待合いにある囲炉裏に、「斯爐中炭火之外不許薪火」とあった。「炭以外をくべてはならん」という注意書きだが、それをすごく綺麗な字で書かれていた。単なる注意書きだが、美しい字なので、背筋が伸びる。美しいもの、優れたものには、説得力がある。
大人の価値観の共有化と言ったが、それは非常に難しい。その中で、蒜山ミュージアムに隈健吾さんの建築物移築の実現、岡山県で最初のSDGs未来都市表明など、真庭では様々なグローバルやアートを見据えた施策を推進してこられた。そういったものの前に立つと大人も背筋が伸びる。
倉敷中央病院には、病院の機能とは関係ない植物園や噴水がある。噴水にはラテン語のような美しい文字が書かれており、綺麗な水が流れている。患者さんがそれを見て心が癒されるということが一番の目的だと思うが、医師でも教師でも疲れると、「持ち出し」の部分が疎かになることがある。あの美しい噴水を見て、それと語り合うことで、いやいやもっとできると思う自分が生まれる。
美しいもの、優れているものは、説明しなくても前に立つ者の背筋を伸ばさせる。それはとても大切なことである。
文化功労者に選ばれた高橋秀先生が倉敷の沙美海岸に住まれているが、その方がこんなことを言われていた。「１本の線を引くのに、何か月も同じ線を引き続けて『これだ』という１本に巡り合う。」アートとは「これだ」と納得できる１本の線。アーティストが心血を注いで引いた1本の線への思いや情熱に対するリスペクトが大切である。その場で心に入らなくても何かの折に感じることもある。
様々な意味で、アートに対するリスペクトを教育文化の根幹に置くというのは大切だと感じている。

荒瀬先生：山下先生の意見に賛同する。美しいアートというのは別のものみたいなイメージがある。工芸品のような身近なものは大事であり、美しいものに触れることはとても大事である。
本当に子供たちに届くのは美しい言葉ではないか。その子にとって美しい言葉を、大人が考えていくかがとても重要なのではないかと思う。国や県、市町村、学校などを経ると、基準がどんどん単純化・単一化されていき、それに合うかどうかで評価が行われる。その最たるものが、山本先生が話されていたように、算数ができないという評価となる。そうではなく、その子にとって何が一番いいのかと考えることが重要だ。いかにして美しい言葉を大人が発せられるかが、とても大事なのではないか。
アートという言葉が出てきたが、平田オリザさんと話した際にアートとデザインの違いについて話した。アートとは自分が出したいもの、表現したいものである。一方で、デザインとは相手のために出すものである。デザインするという発想で、どう子供たちに教育していくかという

ことが非常に大事である。
そのような意識を持って、答申をまとめた。
いかにその子のための言葉を出すのか、取組を紡いでいくのが大事だと思う。
質問であるが、真庭市において子供に対する自己肯定感において、どんな課題があるのか。
それぞれの立場から自己肯定感について述べよと指示があったので、余程真庭市が自己肯定感について取り組んでおられ、それに対するこういう課題があってという話しがあるのかなと思ってきた。必ずしもそうではなかった。自己肯定感について課題があるのであれば、今後に向けて教えてほしい。
もう一つ質問であるが、教育長の説明2ページ目下部にある「真庭市で考える自己肯定感について」がある。これをまとめれば、真庭市が考える自己肯定感の定義となる。これが小学校や中学校を始めとする真庭市内の公立学校での教育や真庭市の大人がどのように捉え、そのように捉えるから自己肯定感が大切であるという話になるのではないか。それに対する取り組みについても教えてほしい。

教育長：自己肯定感に関する課題について、国立教育研究所による自己肯定感や主体的な学びの意欲が挙げられる。真庭では小規模学校が多い。その結果、主体性や外に出た時の自己からの発信力がないということが挙げられる。これは経験の未熟さからによるものもある。それが課題である。
また、それにより、新たな繋がりが生まれにくい、会話が成り立ちづらいということがある。そういう意味で自己肯定感がキーワードになるのではないか。
それと同時に、今までの結果が他と比べることが正しいのかはわからないが、「自分には良いところがある」という質問について、肯定できづらい・不安があるという傾向がある。自信持って、自分にはいいところがあると、自分は自分であって尊いよと言える子どもに育てることだ大事である。
具体に課題を分析しているという状況ではない。
自己肯定感の定義ができていない。今の段階ではこういう風に考えていけばいいのではないかということである。ただし、取組は大きな2つの柱を立て、多様な地域・自然との関わる中で育んでいきたいと考えている。

市長：定義自体は今後詰めていければいいと思っている。
教育は、教育委員会がしっかりやっていく。
自分探しをしていく中で、進路や職業を決めていく。その環境整備をしていくのが教育である。
真庭市はすでに35人の少人数学級を進めている。個人を見ることがで

きる環境ではある。
農業・自然環境として何かを作るという機会は作ることができる。現状はあまり作れていない。そして、閉ざされた一面もある。そういうマイナス面もある。真庭の良さを活かして、自分探しをし、成長していくことを行いたい。
文化芸術も大事な視点である。
より具体的な話ということで、高校との連携のテーマに進んでいきたい。

教育長：資料５をご参照ください。県立高校であるため、教育委員会の所管ではない。具体的に何かを行っているというものはない。
今後やっていきたいことを含めて話したい。
現状は、真庭市の校地解消がまもなく行われる、それに伴い、定員が大きく減少する。過去の経緯を見ると、高校の定員が減るということは地元高校への進学が大きく減ることになる。可能であれば高校までは、地元で学び、地元の良さを体感し、地元企業も具体的な姿も学んでほしい。
基本的には義務教育で繋がっている市政の方向を高校まで繋げて、真庭の地域資源を生かした学びをする。その中でキャリア教育という観点を繋げる取組を行っている。
その軸は、地域を学びのフィールドとした郷土学習とインクルーシブ教育を行くということである。
現状としては、それぞれの学校の教育課程で学校設定科目と個別に連携して側面支援をしている。同時に、教育課程の外で子どもたちが活躍する場を設けている。実際に自己決定をして高校生が地域貢献をするというしくみがある。
それを一歩進めて、今までは連携だけだが、今後は連携プラス伴走を行いたい。伴走をどのように行うかというと、教育コーディネータを配置して、学校と学校外の地域資源を繋ぎ、学校の学びをサポートすると同時に地域の活動をつなぐものにしたい。
コーディネータを置いて、地域の周りを繋ぎ、校内の教育課程と結びつけることを目指している。
高校側としては、学校自前主義を脱却する。地域側としては、地域に若い力を入れて元気にしていく。両側面から考えている。
それからさらに一歩進み、社会に開かれた教育課程として、学校・地元自治体・地元の産業界が一緒になり、新しいカリキュラム開発をしていこうと、各方面と調整している。

市長：県立高校だから県ということではなく、真庭で活躍する人材のために協力したい。ただし、高校の主体性を持ちながら、より魅力的な高校教育をしてもらいたい。真庭学習塾のように、高校生が地域貢献していく場も応援したい。

荒瀬先生：中教審の高等学校ワーキンググループでもまとめが出ている。その中で地域との関わりをどのように進めていくかということの提言もある。島根県で活躍されており、全国的に活動している岩本悠さんもその中のメンバーである。彼の発言も先ほどの意見に含まれている。
高等学校が整理統合されてなくなることが地域にとっては大変なことである。何のために残すのかという時に、子供たちにとって意味のある残し方でなければ、大人の勝手な発想にしか過ぎない。どんな高等学校を中学生が求めているのか、なぜ中学生が地元の高校に行かないのかということを考えなければならない。それなしに、具体的に地域とのつながりを作ることは大人の発想であり、子供たちが魅力を感じるのかという疑問がある。広島県は高等学校の魅力化を相当進めている。それに携わっているが、その際に、誰にとって魅力のある学校をつくるのかを申し上げている。それを中学生に聞くと、意外と分かっている。その答えを持っている子どもに聞かないで、どうしようああしようというのは難しいのではないか。
そもそも高等学校で定員割れしている現状をしっかりと分析していかなければならない。例えば、定員設定が妥当ではないのか、高等学校として魅力がないのかなどがある。
本日岡山駅から送迎していただいた方はＵターン組であった。戻られた方が市内に高等学校があるかないかというのはＵターンする方には非常に大きな問題である。島前高校の例を挙げると、ＵターンやＩターンをすることを考える人にとって、島の中に高等学校がなければ、その島にいる必要がないこととなる。テレワークなどの ICT 化が進み、仕事の面では移住することは問題ない。しかし、子どもの教育の場がなければそこにいる必要はないとなる。むしろ、流出が進んでしまう。しかし、学校を残す際には意味のある残し方をしないといけない。デザインの発想であり、相手が存在するため、これは相当大変である。
雲南市内の県立高等学校では、地元として、どう協力できるかを考えておられるそうだ。全国から生徒を集めるにあたり、どう生活するのかといったことだ。家を民宿にするなど、住民の協力が必要になる。
時機を逸すると手遅れになってしまうので、スピーディに対応する必要がある。

山下先生：感慨深く話を聞いた。私が勝山の教頭として赴任した際に、高校の再編整備の最後は真庭だと言われた。その調査が初めての仕事であった。勝山や蒜山に話を聞きに行った。これがいいスタートを切ってほしいという思いがある。
学科再編成後は、専門科の定員の減少が激しい。真庭に赴任するまでは専門科との関わりがほとんどなかった。専門科には施設や設備が必要で実習教員も大勢いるし、ゴージャスだと思った。1 年間関わって、設備等が充実している意味があると思った。いろんな意味で地域と絡むこと

がある。先ほど結節点であると申し上げたが、学校教育に地域と連携した形ができるのは専門科であるからである。勝山高校でも思ったが、最近では普通科と商業科が教員も含めて仲良くなっていた。例えば、普通科の生徒が経済系の学部へ進学するときに商業科とセッションしたりする。商業科の子が地域の風を入れてくれるので、普通科にいても、外の空気を感じられる。これは併設校での良さを感じた。専門科はお金がかかっても、地域にとっては意味があると思った。
普通科で特色を出すためには、よっぽどの腹括りが必要である。岡山県内では和気閑谷が全国区で募集をかけている。そのぐらいの思い切った作戦が必要である。ただし、和気閑谷がうまくいっているわけではない。
岡山大学に2年間籍を置いたが、その際に県北プログラムという、教育学部の中に県北の教員を育てるコースを作った。最初に、学部長に特色を聞いたところ、県北だからと言って特に変わりがないと言われた。このままでは、他のコースへ進めなかった人の受け皿になってしまう、県北にある課題に対してトライする高校生がほしいと思った。時期と合ったのが、総合的な学習の時間にて課題探究（解決）型学習を地域フィールドで行ってきた子が育ってきており、そんな子がこのコースに入学してくれた。幼いながらも果敢に挑戦しようと、新庄村に泊まったりしている子がおり、発表を見て、これだったなと思った。そこで、思い切って推薦入試で取りましょうということになった。結果はこれからだが、県北プログラムは思い切ったものであった。
真庭には腹くくって他所とは違うという方針を出すだけの特色ある土壌がある。SDGsとはグローバルスタンダードである。私自身も女性で、校長就任時にはいろいろ言われた。その時にへこたれなかったのは、「この人、随分頭の固い人だな」「古い考え方だな」などと思ったからである。
知識とかグローバルスタンダードが、自己肯定感を助けてくれる。その意味では、SDGs未来都市宣言をしている真庭市でどこにもない方針やキャッチフレーズを太田市長が出して、それに従って実施していけば、進学実績などではない面白いことができるのではないか。
高校入学時に、満足度のアンケートをとった。その際にあまりにも低く、気持ちがふさがったことがある。進学実績で横並びにされたら勝つ法則は少ない。ここでないと出せない味や魅力を打ち出すことで最終的に結果として勝つことができるのではないかと期待している。

山本先生：5年間、東京で日本の地方大学をどうするのかを考えていた。内閣府の地方大学へ振興の方針を出した。でもこれは、「選択と集中」を前提にしていて、単純に評価できるものではない、特徴を出して生き残れ、総合大学はいらないという流れがある。それは、高校の衰弱化にも繋がっている。
島根大学に注目してきた。地域魅力化コーディネータの養成を4年くら

い行った。岩本悠さんが中心となったプログラムであり、島前高校の成功プログラムをそのまま島根大学が引き取って、島根大学の冠で予算を取って行った。これに私は関心をもち大変面白いと思い、しばしば度島根大学へ通った。地域実習にも付き合った。地方国立大学、岡山大学も安心できない。地域がしっかりしないと、あっという間に政策的に切り捨てられる、統合させてしまうという政治の危うさがある。
高校の問題は地域・自治体が持続的に発展するため、維持していくためには、切実な問題である。総人口 6000 万人時代に向かって日本は進んでいるが、今の政府はリニア沿線に日本が集約すればいい、リニア新幹線網以外は、猿と猪と鹿ぐらいが住めばいいと思っているのではないかと思わざるを得ない。これは、増田寛也さんの消滅自治体論はへの反論で、知事会会長であった山田京都府知事が講演で言われていたことである。そんな未来にするかどうかは、今の私たちが考えなければならない。そのために高校はとても大切であり、子供にとっても、大人にとっても、どういう意味のある高校を残すのかを真剣に考えていかなければならない。
島根の地域では、教員ではなく、その高校の同窓生であり、地域の人が入っていき、数年かけて、地域の高校を守るという合意を作っている。島根に東京から来たの高校生に話を聞くと、東京から島根に行くという選択した理由がある。それは東京にいたくない、新しい自分を発見したいと理由である。彼ら他地域から来た高校生が、進学で東京へ行くが、将来は戻ってきて、この地域を発展させるという決意を話していた。それは地域の人に育ててもらったという思いがあるからである。地域の人が地域を持続させたいのであれば、この問題を真剣に考えなければならない。いい大学へ進学させることだけではなく、この地域を発展させるためにどのような若者を育てるべきか、あるいは外から若者を呼びどのように育てればいいのかということを真剣に考える必要である。島根県には前例があるし、和気閑谷高校のコーディネータも島根大学の研修に来ていた。そして、真庭では、今後どんなコーディネータを起用するのか、関心がある。期待もしている。

教育長：子供たちを育むという軸と地域が元気になるという軸であれば、主体は高校であるが、地域社会や企業、自治体も合わせて、ともに共創していく関係を築かなければ、成り立たないと感じている。
同時に山下先生がお話された岡山大学の県北プログラムには、真庭学習塾に参加した生徒が進学している。まだ卒業生が出ていないのでわからないが、全員が真庭に戻って教員をすると話している。このようにいい循環を作っていくことは大きな効果が出そうである。この子たちは地域貢献している、非常に有用感が高い。教育課程外ではあるが、そのような場所を市と学校が協力して作り出していくことが大切である。

井口委員：真庭高校落合校地のすぐ近くに住んでいる。旧校地跡が農地

化されると聞いている。住民がそこをどうするか、長年考えていた。私個人としては何かができるより、人を残す方が大切だと思っている。なので、大変よかったと思っている。
地域で育てることで地域に帰りたいという気持ちが育つのであれば、真庭高校のバックアップをしていかなければならないかなと思う。
住民の方々と行政のトップの会議になかなか関わることができないが、地域の方もこういう議論に耳を傾けてほしい。

徳山委員：10 年前落合小学校に勤めていた際に、山下先生から小学校と連携したいと言われた。その際に、究極の青田買いだということを言われたこと思い出した。高校もそのような時代なのだと思った。
今、真庭の高校にて、地域に出ていく、そして地域と連携するということを進めているように思う。これをさらに進めることが必要だと思う。そのために、「真庭市共育コーディネータ」の役割がとても大事になるのではないかと思う。それがうまくいけば、学校もいいし、地域もいいということになるのではないか。
誰がコーディネータをするのかが大切になってくる。そして、どういうサポートをするのかも大切である。
地域学校本部との関わりもきちんと進めていかなければならない。

常本委員：荒瀬先生がお話しされていた「中学生がどう思っているのか」というアンケートを取った。5 年前の話になるが、その際には「普通の高校生活を送りたい」という答えが多かった。普通が何を指しているかは不明ではある。「勉強をして部活動をして安心を感じられる高校生活を送る」「大学に行きたい、そのために普通科に行く」という答えであった。
今秋に小学校を回ったが、地域と連携した活動を行う小学校が多かった。小学生も「良かった」「楽しかった」という意見ではなく、具体的に自分の言葉で語れる子どもがこの 4 年間で多くなった印象を受けた。ある小学校では、「動物園が欲しい」という意見に対して、「周りに猪などがたくさんいる」と意見を言う子もいた。そして、「それよりもイオンが欲しい」という子がいた。そこで教員が「なぜイオンができないのだろうか」と問いができれば、どんどん考えることができる子供が増えるのではないかと思った。それがこれから求められる子供たちであり、子供たちが主役となる学校や教育なのだろうと感じた。その子たちが今成長する中で、中学校がもっと行ってほしい。高校で行っているのであれば、もう少し増えてくるのではないかと思う。
22 年に向けて、早急に高校の先生と市と地域、有識者を交えて、高校をどのようにするのかを話をする場が必要なのかなと思った。県立高校なので、県との話も必要だが、学校が主体を持ってやらないと、県は地域や市がどのように思っているのかを聞かれる。しっかりと市とタイアップしながら行わなければならないと思う。

原点は誰のための学校なのかということを皆で考えて共有しないと、高校がなくなっていく。県内を見ても、お店もなくなったり荒んできたりしている。教育委員会でも話すが、自分事として真庭の将来や学校の将来、子供の将来を、みんなで考える必要がある。
農業を勉強した後、なぜ農業をやらないのかとよく質問される。今の子どもは一緒にやろうというのがすごくヒットするのではないか。一緒に行い、成功したということが最初の段階でやらないと、続かない。
退職してから企業の教育担当として、ディズニーアカデミーを受けてきた。その中で、社員がゼロから教える場合には、必ず一緒に行って覚えていく。そして、少し離れて、実践していく。それを繰り返して、独り立ちさせていくということを行っている。まさしく、そのやり方が必要なのだと思った。
なんとかいい学校づくり、誰にとって魅力的なのかを考えながらやっていきたい。

髙谷委員：複数校地が解消され、統合することを真庭に高校が残ることが当たり前だと思って聞いていたが、実際にはそれは頑張らないと残らないというひっ迫した状態であるということを初めて自覚した。
自分自身は東京の多摩地区で生まれ育ち、高校までは生まれ育った町にいるというのが当たり前の状況だった。今小学生が地域学習を頑張っているが、小中学生で見る光景と高校生になって見る光景は全然違う。真庭に生まれた子供たちには、真庭で通って景色を見てもらいたい気持ちがある。行政で考えていくことも大事だが、もう少し地域が切実な状況であることを知る必要があると感じた。

市長：難しい問題ではあるが、ほっとけば、生徒は減る、そうすれば学校は縮小する。じっとすれば、学校が残るわけではない。山本先生が話されていたように、おそらく人口減少は止まらない。人口 6000 万人になった際に真庭市がどのようになるかを考えなければならない。
子どもたちにとって自分が将来生きるために、その学校に行くことで自分が魅力あるものに成長できるということがない限り、高校あるいは地域は消えていく。
その際に、私たちはどのような地域を作っていき、その子供に継いでもらえるようにしていくかということだと思う。
1 つは、コロナ禍を経てもグローバル化は通信の発達も含めて止まらない。このコロナ禍が一つの契機となり、安心できる生活とは、生きるとはなんなのかというのが変わっていく契機になった。そのような意味では、中和地区が変わってきている。東京の中目黒でミシュラン 1 つ星を獲った鰻屋やそば屋、広島県で年商 2500 万の捨てないパン屋の三代目が移ってきている。真庭という地で作ることに意味がある。
そのような流れがある。納得できる人生や仕事をしたい。それを目指していくうちに集まってきている。

大量生産大量消費の時代ではなくなってきている。今のシステムでは世界が動かない、それをどう変えていくのか、コロナ禍を契機に進んできている。
そういう意味では密ではない真庭には可能性がある。日本全体、世界が都市の魅力はあるが、それはそれとして、一方ではもう一度密状態をどう変えるか、環境をどう変えるか、まさにSDGsである。将来的に続く地球でなければならない。
そして、世界や日本が進んでいる道と、真庭の目指す道が合っている。高校もその中の一つである。
地域の思い、教員の思いを作っていけば、魅力的なものが出来上がってくるのではないか。
今後地元の高校へ進学する割合が減少すると予測され、工業高校はないが、いろいろあり、選択は自由である。
真庭の高校に行って自分を成長させようという思いを持った。

事務局：その他のところで、1点お願いがある。今回の議題1については、これから議論を重ねるが第1回目として、主旨としては教育大綱に記載されている潜在能力の開発、それを応援するということで、真庭市としてどのような考え方でどのような取組みをしていけばいいのかということを議題にあげさせてもらった。今後の議論で、その点を深めていきたいと思う。
時期を見て、ご意見をいただきたいと思う。ぜひよろしくお願いします。

〇閉会
教育長：今日は大きなテーマ2つについてお話しした。同時に真庭市のみならず、これからの日本を考えるうえで、多くの地域で抱えている問題であり、解決していかなければならない議題であったと思う。本日答えが出て、なにかできるわけではないが、この場で話し合ったことやいただいた知見を参考に、市役所の中でも議論していきたい。そして、地域の方としっかり繋がって、自分事として考える契機にしたい。